

書 評

風戸真理・尾崎孝宏・高倉浩樹編『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの
生産・流通・消費』東北アジア研究センター叢書第58号2016年
Mari Kazato, Takahiro Ozaki & Hiroki Takakura (eds.),
Production, Distribution and Consumption in Mongolian Pastoral Society

湊 邦 生

(高知大学)

MINATO Kunio

(Kochi University)

本書はモンゴルの人々が形成する牧畜社会における経済活動について、牧畜研究を積み重ねてきた気鋭・中堅の人類学者たちが、自らのフィールドワークの成果に基づき、かつ牧畜社会域外の経済システムとの関連を含めて検討したものである。

本書には5つの論考が収められているが、それらはおおむねタイトルに掲げられた生産・流通・消費の順に並びつつも、章によってはそれら3つのうち複数について議論がなされている。ここで5つの章および著者の簡単な紹介もかねて、それぞれの章において議論の対象となっている領域を評者なりにまとめると、表の通りとなる。

表 各章の著者・タイトルと議論の領域

	著者	各章タイトル	領域		
			生産	流通	消費
1.	風戸真理	モンゴル国における住居フェルト生産の変遷 — 工業製品と手作業の製品 —	○		
2.	富田敬大	近現代モンゴルにおける畜産物利用の変化 — 乳・乳製品の域外販売と域内消費に着目して —	○	○	○
3.	尾崎孝宏・森永由紀	内モンゴルおよびモンゴル国における乳酒をめぐる 生産・流通・消費	○	○	○
4.	寺尾萌	運転手からみた自動車輸送 — モンゴル国西部の零細業者による輸送経路の形成と維持 —		○	
5.	堀田あゆみ	モノの流通と消費にみるモンゴル遊牧民の生存戦略		○	○

出典：筆者作成。

人類学をバックグラウンドとする研究者が、モンゴル牧畜民の経済活動について、とりわけ牧畜

社会外までを射程に入れた議論に挑んだ理由について、共編著者は2つを挙げている。1つは、モンゴル系牧畜民の経済活動の議論は流通を抜きに成立しないというものである。共編著者によれば、人類学における牧畜研究がしばしば分類されるという生業論において、生業が異なる人々との流通に関わる経済活動にはあまり関心が置かれてこなかった。この点はモンゴル牧畜の人類学的研究においても同様であり、家畜生産・消費に議論が集中する一方で、家畜生産物の域外への流通プロセスは等閑視されてきた。しかし、人類史上新しい（ゆえに生業が異なる人々との交換が可能な）生業である牧畜が自給的な閉鎖系へと向かう可能性は低く、とりわけモンゴル系牧畜民は牧畜専業的であり、そのような専業性の高さは、牧畜民が必需品とする農産物が自給せずとも確保可能であったことに由来すると考えられる。モンゴルの牧畜は、周囲の農耕社会との関係性によって維持されてきたのである。

第2の理由としては、国家の体制及びグローバルな経済システムをモンゴルの畜産物の歴史にどう位置づけるかという問題が指摘されている。ただし、ここでの問題設定は1990年代以降にとどまらない。モンゴル牧畜社会の近代国家への包含やより広域的な経済システムとの接合が20世紀前半から始まっていることを踏まえ、本書ではむしろ（モンゴル国における社会主義時代を含め）現在に至るまで貨幣が媒介する経済が世界的に拡大してきたプロセスを「グローバリゼーション」と捉え、そのローカルな特徴を議論することに主眼が置かれている。

本書の最大の功績は、上述の2つの理由のうち、前者にまさに関わるものである。岸上（2008）は文化人類学における「生業」が「生存に必要な食料獲得の（1）技術ややり方、戦略、（2）形態や活動、（3）社会経済システム、（4）自給自足的な経済」という意味で使われているとしている（岸上、2008: 533）。評者は人類学が専門ではないため、生業論について深入りは避けるが、この4つのいずれの定義を見ても、他の社会との交換が念頭に置かれていないことは明らかであろう。

他方、モンゴル国遊牧地域において、遊牧民が家畜生産物の域外への出荷・販売・提供、あるいは自らが生産しない茶・小麦等の日常必需品、さらには家畜生産に必要な補助飼料の入手といった域外との交換活動を日常的に行っていることは、過去の調査研究でも示されている（例えば、ダナー・佐々木、2008a；湊、2017）。そもそも、既に貨幣経済が浸透して久しく、自ら生産しない家庭用品・工業製品の入手・利用が当然のこととなった現在のモンゴル牧畜社会において、域外とのモノ・ヒト・カネのやり取りは、もはや生活の前提とすら言えるものである。当然ながら、これは南モンゴル（内モンゴル）も例外ではなかろう。とすれば、域内完結的な生産・分配・消費のみに焦点を置いてモンゴル牧畜地域を論じることは、言うなれば、コインについてその一面のみを見て論じることに等しいのではなかろうか。

域外とのやり取りが等閑視されることに関しては、さらに2点の難点が考えられる。第1に、域内消費のみを前提とする場合と、域外需要への対応（市場経済の下では現金収入の獲得も加わる）を目的とする場合とでは、牧畜生産の形態に違いが生じる可能性が考えられるが、後者への視点がない場合に、そのような形態の違いを読み誤る危険がある点である。第2に、域外からのモノ・ヒト・カネの消費地としての牧畜社会という視点が欠落するという点である。既に述べたこととも重なるが、モンゴル牧畜民の生活は、域外からのモノの利用可能性を前提として成立している。そのようなモノの流入・利用やその変化が当該社会にどのような影響・変容をもたらしているかは、牧畜社

会を理解する上での重要な課題となろう。しかしながら、そもそも域外からのモノの流入・利用場所としての牧畜社会という視点がなければ、このような課題設定自体が成り立たない。

本書は域外との交換・取引によって成り立つモンゴル牧畜社会の姿を描き出すことで、上述の「生業論的」牧畜論の問題点や弊害に対する解決の方向性を示すことに成功している。議論が主に依拠しているのは、著者ら自身が行ったフィールドワークの成果であるが、それ以外の資料を併せて活用する議論もある。第1章では統計資料を基に、1920年代以降のモンゴル国におけるフェルトの生産の変化を示している。乳製品の出荷・販売に関する第2章では、統計・文献資料や聞き取りを基に、現状のみならず歴史的経緯や変化についても論じられている。第3章は馬乳酒と蒸留酒という2種類の乳酒の生産・販売について、歴史的変化の考察と南北モンゴル間の比較が行われており、とくに南北比較は共著者の面目躍如と言えるだろう。

さらに、前述の2つの難点のうち前者については、第1章がフェルト生産、第2章が乳製品生産、第3章が馬乳酒生産について、それぞれ域外需要による生産形態の変化を示している。後者については、第5章がまさに「消費地」としての牧畜社会の現状を描いたものであり、本書によって「生業論的」牧畜論の難点を克服するためのアプローチが示されたと言い得る。

そして、モンゴル国遊牧地域における物流の担い手を追った第4章は、本書における流通の議論の核を成すものである。「流通」とは生産地と消費地を結びつける経済活動であり、この点は畜産物であっても例外ではない(安部、2012)。しかし、第4章以外では家畜生産物の出荷や販売、域外からのモノの流入・利用こそ論じられているものの、牧畜社会から流出後の、あるいは牧畜社会に流入前のモノの流れが見えづらい傾向があった。第4章が置かれることによって、本書は名実ともに流通を主題とするものとなったと言っても過言ではあるまい。

ただし、2つの問題が残る。第1に、本書における「グローバリゼーション」という概念の妥当性である。先述の通り、本書では1990年代に限らない貨幣経済の世界的拡大を「グローバリゼーション」として捉えているが、これはグローバリゼーションをめぐる理論的検討からすればいささか奇異に映る。モンゴル牧畜社会のより広域な経済システムへの接合が1990年代に先立つことは評者も認めるところであるが、接合先となったシステムをグローバルなものと捉えるのは困難ではなかろうか。むしろ、東西冷戦・中ソ対立等、世界経済を分断する条件の下で、牧畜社会はブロック化した経済システムに統合されたと見るのが自然であろう。また、「グローバリゼーション」の概念自体も論争的となっており、そこで論点となっているのは、本書が対象とするよりもはるかに短い期間における変化である¹。牧畜社会が包含される経済システムが世界経済を志向するものであるかどうかは、牧畜社会にも影響を与えるものである。モンゴル国における市場経済化前後の経済システムの変化が牧畜社会にも変化をもたらしたのは、その最たる例であろう。それだけに、「グローバリゼーション」という概念を1990年代以前にまで敷衍することには疑問を感じた。

加えて、本書の主題からは逸れるが、モンゴル国の牧畜生産の形態の変容に関して、牧民の組織化も今後論点となることが予想される。周知の通り、モンゴル牧畜社会は20世紀に社会主義体制下での集団化、そしてその後の市場経済化開始による集団化体制の解体を経験した。一方で、近年で

¹ 「グローバリゼーション」についての理論的検討は既に膨大なものであり、それらをすべて追うのは不可能に近い。ここでは主な論点をまとめたテキスト・レベルのものとしてGiddens (2009) の第4章を挙げておく。

は1990年代に挫折した新たな協同組合の設立が研究対象にもなりつつある（ゾルザヤ、2006；ダナー・佐々木、2008a；ダナー・佐々木、2008b）。南モンゴルにおいても協同的な農業経済組織は観察されており、中には牧畜を主とするものもある（佐々木、2016）。本書の共著者の関心からは外れるかも知れないが、フィールドによっては今後の生産形態の変化を考える上で無視できない問題になろう。

ただ、それらの問題が残ったとはいえ、本書がモンゴル牧畜社会を理解するために欠かせない知見や視座を提供していることには変わらない。むしろ本書はモンゴルのみならず、牧畜社会への貨幣経済の浸透を前提とした上で、世界各地の牧畜社会・経済研究がどのように進むべきか、その道のひとつを拓いたものであり、示唆に富む研究の集積である。ゆえに、本書は対象地域・ディシプリンに関わらず、牧畜社会・経済に関心のある研究者が一読すべきものと言えよう。さらに、本書の著者たちがここで示された成果を踏まえ、今後どのような研究を進めていくか、期待せずにはいられない。

なお、本書はいずれも共編著者の一人である風戸真理氏（北星学園大学）を代表とする東北大学東北アジア研究センター公募共同研究「畜産物の流通に見るモンゴル高原のグローバリゼーション」（2014年度）「モンゴルとカザフにおけるモノの域外流通と域内流通」（2015年）の成果に基づいている。また本書は非売品となっているが、東北大学機関リポジトリ（URL: <https://tohoku.repo.nii.ac.jp/>）等を通じてダウンロードが可能である。

参考文献

- 安部新一（2012）「畜産物の流通システム」藤島廣二、安部新一、宮部和幸、岩崎邦彦『新版 食料・農産物流通論』筑波書房、第5章、pp.74-88。
- ダナー・ゲレルマー、佐々木隆（2008a）「モンゴルにおける牧畜経営規模についての一考察」『農林業問題研究』44（1）：238-243。
- ダナー・ゲレルマー、佐々木隆（2008b）「モンゴルにおける農牧業協同組合の発展要因に関する一考察」『農業・食料経済研究』54（2）：1-10。
- Giddens, A. and Sutton, P.W. (2009) *Sociology (5th Edition)*. Cambridge: polity.
- 岸上伸啓（2008）「文化人類学的生業論—極北地域の先住民による狩猟漁撈採集活動を中心に—」『国立民族学博物館研究報告』32：529-578。
- 湊邦生（2017）『遊牧の経済学』晃洋書房。
- 佐々木達（2016）「中国・内モンゴル自治区における農民專業合作社の組織形態」『季刊地理学』68（1）：55-70。
- ゾルザヤ・ズンドウイ（2006）「モンゴル国における農牧業協同組合の現状と必要性」『農業経営研究』44（1）：178-182。

（全179頁、ISBN978-4-908203-07-7）